

仮面ライダーレーキン

ボルメテウスさん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

こことは違うどこか別の世界、ルフラン。

そのルフランから来訪する魔女達は、現地の人間と契約する事で、人知を超えた存在、契約獣にする。

契約獣は、より強い力を求めるように人々を襲う。

そんな中で、陰キヤなオタクなレンと最強の魔女であり、陽キヤなルカ。

2人が契約する事によって、契約獣『仮面ライダーレーキン』へと変身する。

「さあ、勝利を錬金するぜ」

こちらでの参戦も決まっています。

興味がある方はぜひ、お願いします。

<https://syosetu.org/novel/290753/>

# 目次

魔女と陰キヤの錬金	1
見えないと森と外道	19
衝撃！逃走魚！	30
進むべき決意は	45
魔女の刺客	58
ホムンクルスとの知恵比べ	65
危険な組み合わせ	74
銀龍を纏い	85
2人の契約獣	95
悪意の終わりに	108
後日談	117

## 魔女と陰キヤの錬金

その日、俺はただフィギュアを買いに来ただけだった。

自宅からそう遠くないアニメ専門ショップにて、限定発売されていた仮面ライダーを買った。買っただけで訪れた。

「いやあ、ようやく買う事ができたよ。」

こういうのって、手に入れるのに、なかなか苦労するんだよなあ」

そう言いながら、俺は手に持ったフィギュアを持ちながら、うきうきとしながら帰り道を歩いていた。

「あゝあ、早く帰って飾らないと……」

そう言った瞬間だった。

何やら、騒がしい事に気づいた。

見てみると、コスプレイヤーなのか、如何にも魔女を思わせる格好をした少女が、道端で男達に絡まれていた。

どうも、ナンパのようだ。

正直、俺には関係の無い話だと思ったのだが、少しだけ気になってしまった。

というのも、その魔女っ子の少女が可愛いからという訳ではない。

というよりも、そんな事で気にする程、俺には余裕がない。

ならば、なぜ、俺が気になっているのかと言うと。

「……」

「……なんか、むっちゃ、こつちを見ている」

なぜか、その魔女っ子のコスプレイヤーは、俺を見ている。

そして、なぜか、俺にむっちゃ手を振っている。

「ああ、待っていたよ、えっと、彼氏！」

「んっ?」

俺は、周りを見る。

あんなコスプレイヤーの彼氏はいるのか?

そうして、俺は周りを見ていると共に、なぜか俺の手を握り締めている。

「んっ?」

「もう、買い物をしていたなんて、酷いじゃない」

「……誰?」

本気で分からなかった。

そもそも、この人誰だよ。

てか、なんで俺の手を握ってるんだ？

まさか、さっきまで見ていたアニメの影響とか？

でも、俺はこんな人知らない。

そうしているよ

「よおおお、彼氏がいるなんか聞いていないよお」

「そんな奴よりも、俺達と遊ぼうぜえ」

そうして、ナンパしていたと思われる男達が俺を囲んでいた。

おいおい、マジかよ。

俺は心の中で思った。

どう見ても、これは面倒くさい展開だと。

すると、魔女っ子は俺の前に立ち

「私、これから彼とデートだから邪魔しないでくれるかな」

と言い出した。

そして、さらに驚くことに

「じゃあね」

と言って、俺の腕を掴み、そのまま走り始めたのだ。

そのスピードは、俺の想像よりも速く、俺は引きずられるように走っていく。

それにしても速い。

まるで新幹線のように速い。

このままではマズイと思ひ、俺は声を出す。

「ちよ、ちよつと待つてくれ！ まだ話が終わつてないぞ!!」

だがしかし、彼女は止まらず、そのまま何処かに行こうとする。

「ふう、ここまで来たら、なんとかなつたか。

いやあ、悪かつたね」

「う。ぷつ」

そうして、彼女は話しかけたが、それよりも俺はまるで乗り物酔いしたかのように気分が悪くなつていた。

それも当然だ。先ほどまでの全力疾走に巻き込まれて、今にも吐きそうな状態なのだから。

「ああ、いやあ、悪かつたね。

とりあえず、そこで座つて、休んでおこう」

しかし、それを察してくれたのか魔女っ子は近くのベンチに座らせてくれた。

そうして、落ち着いたところで改めて魔女っ子の方を見た。

コスプレというには、かなりレベルが高い。

映画の衣装だと言える。

腰まで伸びる金髪に、多少の癖っ毛が見える。

身長もそれなりに高くモデル体型とも言えるだろう。顔に関しては美少女と呼べるものだ。

「んっ、どうしたんだいレン君？」

「いや、別になんでも。」

んっ、なんで、俺の名前を知っているんだ!？」

俺が疑問を口にする、魔女っ子は笑顔を浮かべながら答えた。

「ならば、話そう。」

私の名は、ルカ。

君と契約する為に、異世界ルフランから来た天才魔女よ!」

そう、パチリとウインクをしながら自己紹介をした。

その仕草はとて可愛らしく、そして綺麗だった。

だからこそ

「やばい中二病に絡まれたか」

俺は、ついついそんな事を呟いていた。

「中二病？」

「いや、何も。」

それで、そのルフランからの天才魔女が、俺に何の用なんだ？  
とりあえず、このまますぐには逃げられないだろ。

先程の身体能力から考えても、適当に話を聞いておこう。

「まず、この世界とは別の世界にあるルフラン。」

そこには、こことは違う文明、魔法が発達した世界となっているの」

「へえ、それで、そのルフランはなんでこの世界に？」

「それはね、契約する為だよ」

「契約？」

「ええ、魔女と契約した人間は、契約獣と呼ばれる存在になるの」

「契約獣？」

「契約獣というのは、魔女の力を受け取った人間が変わった姿の事。」

契約獣の力は普通の人間では倒す事はできず、私達の国でもかなり強い存在よ」  
「そんな強い存在を、なんでこっちでわざわざ？」

すると、少しだけ悲しそうな表情を浮かべた後に口を開いた。

だが、次の瞬間には笑顔に戻り、また喋り出した。

「あちらの魔法の国は、結構硬い考えをする人間が多いんだよね。」

それだと、契約獣となっても、強くなる可能性は低いの」

「契約獣って、強いと、何か得があるのか？」

「契約獣の強さは魔女の格を反映させるわ。」

「だからこそ、多くの魔女は強い契約獣を求めている訳なの」

「それじゃ、お前もなのか？」

「そう聞くと」

「まあ、そういう所かな。」

「けど、まあ、君に結構興味があるのは、本当かな」

「そう言いながら、ルカは呟く。」

「そうか、だけど、俺には興味はないので。」

「そういう事で!!」

俺はそれだけ、話を聞くと共に、そのまま立ち去ろうとした。

「そう思った時だった。」

まるで地震を思わすような揺れが起き始めたのだ。

そして目の前には、化け物を思わせる蜘蛛だった。

「……………いっは」

「ああ、蜘蛛の契約獣だね。」

たぶん、私の命を狙って来たのかなあ」

そう、呑気に俺達は会話をする。

同時に蜘蛛の契約獣は、こちらを睨むと共に、凄い勢いで、迫ってきた。

それと同時に俺達は走り出した。

後ろを振り向くと同時に、糸を吐いて攻撃してくる。

それをどうにか避けて逃げ続けるが、蜘蛛の契約獣の攻撃の手は止まらない。

「このままではジリ貧だ」

そう思いながらも逃げる事しか出来ない。

「どうしよう。」

さすがにこの状況では契約はできないよ」

「契約すれば、どうにかなるのか？」

「なるには、なるよ。」

「けど」

そう、少し迷った表情を見せるルカ。

「何かあるのか？」

「こんな状況で、契約しても、君は後悔するだけだから」

その言葉に思わず笑みを浮かべる。

「だけど、この状況をどうにかなるんだろ！」

それに、このままじゃ、たぶん、他の人は巻き込まれる可能性の方が高いだろ!!」  
そう言うのと、ルカは一瞬驚いた顔を見せた後、笑顔を見せてきた。

「そうだね。」

だからこそ、君には頼めるからね」

その言葉と共にルカが投げたのは、何か釜だった。

首を傾げる。

「これって、何？」

「私こと、錬金の魔女であるルカの象徴。」

それを君のイメージを組み合わせる事で、契約する事ができる」

「だからって、鍋って」

そう、疑問に思いながら、俺が簡単に思い浮かんだのは、仮面ライダーだった。

同時に鍋は、まるで変身ベルトを思わせる形へと変わった。

『レンキンドライバー』

「あつ、変わった」

「えっ、何それ!？」

「なんか、イメージで」

俺はそのままレンキンドライバーを腰に巻く。

同時にレンキンドライバーにある蓋を開く。

『マーゼマーゼ』

ルカから渡されたレンキンドライバーから、音が鳴り響く。

呑気に聞こえる音に疑問に思っていると、ルカは興味深そうに見る。

「へえ、これが私と君の契約した証か。

結構、面白いねえ」

「良いから、ここからどうするんだ」

「ああ、ごめんごめん。

とりあえず、えっと、これとこれ！」

そう、ルカは近くにある石と俺が買っていたフィギュアを手取る。

同時に二つの物は小さくなり、見た目はビー玉を思わせる何かに変化する。

「ああ、俺のフィギュア!!」

「もう、後で戻せるから。

それよりも、ほら、この中に入れる」

『ツチー！ フィギュア！ マゼラレール!』

それと共にベルトの内部から大きく輝き出す。

「これって!」

「それじゃ、蓋を閉めて、変身!!」

「えっ変身!?!」

ルカはそのまま明るい声を出すと共に、俺もまた勢い良く言ってしまう。

それと共に、レンキンドライバーには蓋のような物に閉じられる。

『レーキン! 土で出来た頼れる奴! ゴーレム! コネクト!』

その音声と共に、レンキンドライバーからまるで飛び出るように出てきた光はそのまま俺の身体に包み込まれる。

包み込まれると共に、身体はまるで魔女の釜を思わせる鎧に。

頭には、蓋が兜をイメージさせ、僅かにひび割れており、そこから目を覗かせる。

そうして、変身している時に見えた鏡で、俺の全身を見る。

「えっ、これって、仮面ライダー?」

特徴はあまり違うが、それでも仮面ライダーを思わせる姿へと変身していた。

その事に俺は疑問に思っていると、ルカは頷く。

「仮面ライダー。」

「良いねえ、君は今日から、仮面ライダーレーキンだ!」

「なんだか、タイムジャッカーみたいな言い方、止めてくれる」

「ほら、それよりも、後ろ後ろ」

「えっ？」

ルカの言葉を聞き、思わず振り向く。

そこには既に蜘蛛の契約獣が、その口から糸を俺に向けて飛ばしてくる。

「うわっ！」

慌てて避けようとするが、しかし間に合わない。

そのまま俺に向かって飛んでくる糸。

その糸は俺の腕を拘束し、動きを止める。

そしてそのまま引き寄せられていく。

「なんだよこれ、離せ！」

必死に抵抗するが、一向に離れる気配はない。

その間にも、ゆっくりとだが確実に近づいていく。

それと共に、俺に向かって、蜘蛛の脚が俺を突き刺そうとする。

「っ!! あれ？」

そう、突き刺そうとした俺は首を傾げる。

あまり痛みを感じない。

その装甲は、思っていたよりも遥かに硬く、簡単には貫けないようだ。

俺はそのまま勢い良く蹴り上げる。

すると、蜘蛛の契約獣はあっさりと蹴り飛ばす。

そのまま蜘蛛の契約獣の巨体は吹き飛ぶ。

地面を転がりながらも体勢を整えて立ち上がる。

どうやらダメージはほとんどないらしい。

それと共に蜘蛛の契約獣は近くの建物に向けて、蜘蛛の糸を放つ。

そのまま宙を舞いながら、そのまま俺に襲いかかってくる。

俺はそれを腕で防ぐが、やはり衝撃は少ない。

それどころか押し返せる程だ。

蜘蛛の契約獣はそのまま再び地面に落ちる。

だが、同時に蜘蛛の契約獣の口から無数の卵を産み落とす。

それと共にまるで泥を思わせる人影が現れる。

「うわっと、増えた!!」

「契約獣が分裂したようだね」

そう疑問に思っていると、分裂した契約獣は、俺に向かって襲い掛かる。

分裂した契約獣が俺に殴りかかる。

拳を掴んで、そのまま蹴り飛ばす。

蹴り飛ばすと共に、他の分裂した契約獣達が、俺の体に巻きつくように纏わりついてくる。

そしてそのまま締め付けるようにして、俺の動きを止める。

その間にまた別の分裂体が、今度は俺の腕を掴む。

そのまま関節を極めるようにして、動きを止めようとする。

だがそんなものは全く効かない。

俺はそのまま蹴り飛ばそうとするが、それは叶わない。

蹴り飛ばされた分裂体は、すぐに体勢を立て直す。

それと同時に腕を離し、後ろに下がる。

俺の攻撃をかわした後、一斉に攻撃を開始する。

分裂体達は全員で俺を取り囲み、殴る蹴るなどの攻撃を行う。

だが、全く効く様子がない。

それどころか、逆に俺の方から攻撃を繰り出す。

手刀や回し蹴りなどで反撃を行い、次々と分裂体を仕留めていく。

そして全ての分裂体を吹き飛ばしていく。

「凄い。

まさか、ここまでなんて」

それを見ていたルカは思わず呟く。

「さて、あとはって」

そう思っていると、俺は足下を見る。

そこには蜘蛛の契約獣によってできたと思われる蜘蛛の巣があった。

どうやら、先程の分裂した契約獣を囿にしていたようだ。

そして本体はその間に糸を出し、罨を張っていたのだ。

おそらくだが、この巣には粘着性があるだろう。

つまりは身動きが取れなくなる可能性があるということだ。

これは不味いな。

どうにかして脱出しなれば。

俺はなんとか抜け出そうとするが、上手くいかない。

すると、蜘蛛の契約獣がこちらに向かってくる。

このままでは攻撃されるな。

「待てよ、確か、この身体って」

そうしている間に、俺は地面を思いつき叩く。

同時に、俺の足下は巨大な柱となる。

それによって、周りに張られていた蜘蛛の巣は取り払い、同時に蜘蛛の契約獣はその

まま宙を舞う。

「それじゃ、決めるぜ！」

俺はそのまま自然の動作で、レンキンドライバーの蓋を再度閉めて、開く。

『レーキンフルオープン！ ゴーレムストライク！』

その音声が届り響くと共に、俺の足下にある巨大な柱を右足と一体化させる。

同時に巨大な石の脚を形成する。

形成させた脚を、そのまま真つ直ぐと蜘蛛の契約獣に向かって、ライダーキックを繰り出す。

蜘蛛の契約獣はその一撃によって吹き飛ばされる。

そして、地面に叩きつけられていた。

「ふう、なんとか」

「それじゃ、さっそく」

その言葉と共にルカはそのまま懐から取り出したのは、ソザイタマだった。

何も入っていないソザイタマだが、それを真つ直ぐと蜘蛛の契約獣に投げる。

すると、蜘蛛の契約獣に、ソザイタマは吸い込まれる。

そして、先程の蜘蛛の契約獣がいた所には一人の人間が倒れていた。

「それは？」

「契約獣の力を奪ったの。」

「まあ、これで、こいつは悪さはできないと思うよ」

「にしても、なんで襲ってきたんだ？」

「突然の出来事だったので、俺は首を傾げる。」

「契約獣は他の契約獣の力を奪ったり、人間の魂を喰らう事で強くなるの。」

「だから、この契約獣もおそらくはそういう目的だと思うの」

「そうなのか？」

「まあ、私って、天才だからね。」

「それで、狙われたかもね」

「そういうもんか」

「俺は呆れたように言うが」

「……あれ、という事は、そんなルカと契約した俺は」

「まあ、うん。」

「襲われるね」

「ルカはそう言って笑う。」

「どうやら、俺とルカは命を狙われているらしい。」

「……ええ」

陰キャである俺は困惑しながら呟く。

## 見えないと森と外道

先日、異世界から来た存在である魔女。

その魔女の1人であるルカと契約する事で、俺は仮面ライダーレーキンへと変身する能力を得た。

そして、今日、俺は何をしているのかと言うと。

「美味しい!!」

そう、目の前で俺の作っている料理を食べているルカの飯を作っている所だった。

「お前、元の世界には帰らないのか」

そう、俺はルカに尋ねる。するとルカは首を傾げる。

「いやあ、私って、向こうの世界では、ほら、天才なのよね」

「天才って、自画自賛か？」

そう、ルカの言葉に対して、俺は少し呆れながらも言う。

「それでね、私が契約した事を知られるとね、周りの国や連中が黙っていないのよ。

まあ、ようするに、今、向こうに行く」と

「行くと」

「殺されちやう」

そう、ルカは笑顔で言う。だが、それは冗談ではなく本当の話だろう。

「だからこそ、しばらく安全の為に、私は君の家で居候しなくてはいけないの」

「だとしてもなあ」

そう言いながら、俺は目の前でルカが食べた食事の量を見つめる。

大食いキャラなのか、それともただ単に食べる事が好きだけなのか、ルカはよく食べる。

そんな彼女の為に作った朝食としては多すぎる量を用意してしまったのだ。

だが、それでもまだ食べ足りないらしく、彼女はテーブルの上に並べられた皿を見て、口を開いた。

「じゃあ、もうちょつと頂戴」

その言葉を聞き、俺はため息をつく。

どうやら、食費は俺持ちになりそうだ。

それから数時間後、空になった食器を洗い終えた後に、ソファアに座っているルカに話しかける。

「それで、これからの事なんだが」

そう言つて、俺はポケットの中から取り出した一枚の紙を取り出す。

「私達を先日倒した契約獣。」

あいつは外道魔女と呼ばれる幹部の1人と契約したと思われるの」

「外道魔女？」

「魔女の中でもとびきりやばい奴らの事よ。」

その中で幹部は鳥、猿、蜘蛛の3人よ」

「幹部クラスをいきなり倒したのか、俺は」

「まあ、これも私の力のおかげだけだね」

そう、ルカは胸を張って自慢げに言う。

だが、その事にレンは特に何も言わず、話を戻す。

「それで、その外道魔女と、これから何が関係するんだ？」

「外道魔女は私達の所でも特に厄介なお尋ね者なの。」

だから、これから私達はその外道魔女を倒して、国の英雄になる」

「英雄になるって、それはまた」

「そりゃ、英雄になれば、国民からの支持がある。」

支持がある者を相手に、他の魔女達は手を出す事はできないでしょ」

「だから、英雄になるか」

保身の為に、ヒーローになるとは、随分と情けない考えだと俺は思った。

しかし、それでも

「既に奴らはこつちで暴れるんだろ」

「そうだね、外道魔女は、余計に手段は選ばないからね」

ルカの言葉を聞きながら、俺は腰にあるベルトに触れる。

そして、そこに存在する剣に触れて、ルカの方を見る。

「なら、俺がお前を守る」

「へえー、守つてくれるんだ」

「まあ、仮面ライダーと名乗った以上はな」

そう言つて、俺はルカの手を握る。

同時に、ルカの顔が歪む。

「ルカ？」

「どうやら、もう出てきたようだね」

そう言いながら、ルカは窓の外を見る。

その窓の先には、この街から少し離れた森が見えた。

「レン、急いで行くよ」

「それは、分かっているけど、あそこまでは」

「ふふつ、そこは鍊金の魔女に任せなさい」

そう言いながら、俺達はそのまま向かったのは、俺の自転車だった。

「自転車？」

「この自転車をソザイタマにして、先日蜘蛛のソザイタマを組み合わせて！」

そう言い、ルカはそのまま俺の腰にある二つのレンキンドライバーにソザイタマを投げる。

『レンキンカンリョー！ クモバイク』

「クモバイクの完成だよ！」

それと共に出てきたのは、蜘蛛の要素が合わさったバイクだった。

先程までは何の変哲もないバイクが、摩訶不思議な事に変形したのだ。

しかも、タイヤの代わりにあるのは大きな目玉だ。

その目はギョロギョロと動き回り、そして、レンの姿を映す。

その姿はまるで蜘蛛そのものの姿になっていた。

「ルカさん、これ、元に戻りますよね」

「もう、フィギュアの時は戻ったでしょよ。」

ほら、さつさと乗って！」

そう、俺をクモバイクの上に促す。

かなり気持ち悪いが、仕方ない。

俺はそのままクモバイクに乗り込み、そのままルカも乗り込む。

「それじゃ、発進！」

そう、ルカの言葉と共に、クモバイクは走り出した。

そのスピードはかなり早いもので、すぐに森へと辿り着く。

「それにしても、契約獣はどこに？」

「結構近いけど」

その疑問はすぐにも出た。

背後から感じた殺気と共に、俺はすぐにクモバイクを動き出した。

蜘蛛の動きができる事もあってか、周りの木々を潜り抜けながら、迫ってきた殺気か

ら避ける事ができた。

同時に見えたのは不気味な猿を思わせる契約獣だった。

「こいつはさつき言っていた」

「猿の契約獣だね。」

「結構厄介そうだ」

その言葉を聞きながら、俺は懐から取り出した二つのソザイタマをそのままレンキン

ドライバーに入れる。

「変身」

『レーキン！ 土で出来た頼れる奴！ ゴーレム！ コネクト！』

その音声と共に、俺は仮面ライダーへと変身する。

同時に、襲い掛かる猿の契約獣からの爪による一撃を、受け止める。

「ぐっ」

土で覆われた腕により、ダメージはそれ程なかった。

しかし、猿の契約獣はそのまま後ろに下がると共に、森の中へと隠れた。

「レン」

「ああ、分かっている」

俺は同時にクモバイクに乗り、走り出す。

周りの木々に隠れている状態の猿の契約獣は、ヒットアンドウェイ戦法で、攻めてくる。

それに対して、俺はすぐに反応できるようにしているが、中々に攻めきれない状況が続く。

「うーん、やっぱり戦い慣れてるなあ」

ルカの言葉通り、確かにこの猿の契約獣はかなり強い。

俺達の攻撃に対して、的確に回避し、攻撃を当てに来る。

そして、こちらの間隙を見つけては攻撃を仕掛けて来るのだ。

「どうすれば」

「ふふっ、だったら、組み合わせを変えてみるか」

「どういう意味なんだ？」

「こういう事」

そう言い、ルカが取り出したのは、また違った二つのソザイタマだった。

それをそのままレンキンドライバーに入れる。

『スモーク！ ウィンド！ マゼラレール！』

その音声と共に、猿の契約獣の一撃は、空を切る。

「キィ!？」

それに驚きを隠せない間にも、俺の身体はそのまま宙を舞う。

『レーキン！ 擦り抜け不気味な奴！ ゴースト！』

その音声と共に、俺は、まさにゴーストを思わせる姿になっていた。

「確かに、これだったら、攻撃は通らないけど！」

それと共に、俺は猿の契約獣に向けて、殴る。

だが、その拳は通り抜けてしまう。

「これじゃ、攻撃もできないっ」

俺自身が煙になっているので、まるで攻撃ができない。

これでは、戦う事はできない。

「大丈夫だよ、その姿だったら、ひゃあ！」

そう言っている間にも猿の契約獣はそのままルカに襲い掛かる。

このままでは、危険なのは、間違いない。

だけど、どうすれば。

「だとしても、この姿でどうすれば」

そう思っていると、俺は自分の身体をよく見る。

同時にとある事に気づく。

「もしかしたら」

その言葉と共に、俺はそのまま猿の契約獣に向かって行く。

猿の契約獣はこちらの存在が分かっているようだが、脅威ではないと感じた様子で、

無視した。

だが

「風が操れるならば、こうする事もできるだろ！」

そう言い、俺はそのまま猿の契約獣の前に通る。

同時に俺の身体が運んだ砂で、猿の契約獣は目が潰れる。

「風は物を浮かす事ができる。」

そして、煙は姿を隠す事ができる。

つまり！」

同時に俺は猿の契約獣の周りを囲む。

それに対して、猿の契約獣は混乱している様子だった。

そんな猿の契約獣に向けて、俺は風で運んできた石や木の枝で攻撃を仕掛ける。

普通ならば、それ程のダメージはないだろ。

だが、突風で勢い良く激突する物のダメージは僅かだが、確かに猿の契約獣に与える。

そして、その数が数え切れない程ならば。

「ウギィー！」

すぐに逃げだそうとしたが、煙によつて、視界を塞がれ、どこから攻撃が来るかわからない状況。

猿の契約獣は恐怖を感じながらも必死に逃げようとする。

しかし、風の能力により、動きを止める事ができず、ただ無駄な足掻きをするだけだった。

やがて、動けなくなつた猿の契約獣に向ける。

「これで、決めるぜ!!」

『レーキンフルオープン！ ゴーストストライク！』

大量の石の弾丸と木の実などが襲い掛かる。

それが何度も続き、猿の契約獣は地面に倒れ込む。

そして、変身を解くと同時に猿の契約獣に近づき、ソザイタマを近づく。

同時にソザイタマに猿の契約獣の力は吸い込まれていく。

「これで、残りは一体か」

「そうだね。」

「けどね」

「んっ」

同時にルカは少し悩んでいる様子が見られる。

「どうしたんだ？」

「少しね。」

外道魔女以外にも、厄介な奴が来るのか、どうか。

少し心配になってね」

「厄介な奴？」

「とりあえず、今は、帰ろうか」

そう、ルカは空元気を見せる。

だが、そんな彼女の様子を見て、不安になる。

## 衝撃！逃走魚！

以前の戦いから既に1週間が過ぎていた。

その間、俺は改めて、自身が使っているレンキンドライバーの事に関して、調べていた。

レンキンドライバーは、様々な物が納められているソザイタマ。

そのソザイタマをレンキンドライバーに装填する事で、新たな姿に変わったり、道具を作り出す事ができる。

姿に関しては、これまで変身した姿でゴーレム、ゴーストのようにファンタジー作品に出てくるモンスターを模したフォームになっている。

その条件に関しては、未だに不明であり、法則としては、ビルドのベストマッチのようである意味無茶苦茶である。

そして、その組み合わせが上手くなかったら、変身できない。

道具に関しては、今でも謎が多い。

蜘蛛とバイクの組み合わせなど、ある意味、変幻自在と言っても過言ではない程だ。

ただ、俺自身、その能力にはある程度ではあるが慣れてきてしまっているのも事実で

あった。

そう考えれば、あまりにも変幻自在すぎる存在だと言わざるを得ないだろう。

「……ん？」

そんな事を考えていると

「へえ、こつちの世界はこつちやつて映像で物語が見れるんだあ。

なかなか面白いねえ」

そう言いながら、目の前にはルカが山程にレンタルしているDVDで、見ていた。

この1週間、ルカはまさに映画漬けのような生活を送っていた。

「それで、何か掴めるのか？」

「ふふつ、君のレンキンドライバーは常識では考えられないような組み合わせが必要だ。

そういう意味では、映画は大変参考になるからね」

そう言いながら、現在、嵌まっているサメ映画の数々。確かに、俺自身も参考になり

そうな所はあるなと思った。

しかし、ルカが言っている事は半分正解だが、もう半分は間違っていると思う。

何故なら、俺の場合は、相性が良くなければ使えないのではなく、そもそも相性なん

て関係なく使えるからだ。

それはつまり、他の奴らもそうである可能性だということの意味している。

「はあ、とりあえず、晩飯の買い出しに行ってくるわ」

俺はそのまま、今日の晩飯の買い出しに向かった。

こうして、共同生活を始めて、かなり慣れた。

その日は、俺は買い出しに向かった。

「それにしても、魔女達の目的は一体」

こうして、生活には慣れきっているが、分からない事が多すぎる。

現状、俺は残念ながらルカ以外の魔女とは出会った事がない。

その魔女と契約したと契約獣とは多く戦ってきたが、未だに魔女自身とは会っていない。

い。

だからこそ、彼女達が、ルカ以外の魔女が何を思っ、行動しているのか。

正直知りたい所だった。

そう考えていると、商店街の向かい側から、何かが見える。

見つめた先には先程までルカが見ていた鮫映画を思わせる鮫の背鰭が見えた。

水のない、こんな所で。

「いやいや、待って待ってっつてー！」

俺はそう言いながら、すぐに走り出した。

同時にそれは俺を追いかけてきた。

そうして、追われて、明らかに目的が俺を狙っている事が分かった。走りながら、逃げた先。

その裏路地に誘われるように、俺は鯨の契約獣が地面からすぐにその姿を見せる。

「ぐっ、変身!!」

同時に俺はすぐにレンキンドライバーを取りだし、ソライタマを入れる。

『レーキン! 土で出来た頼れる奴! ゴーレム! コネクト!』

瞬時に、レーキンへと変身する事ができたが、瞬間、近くにある壁から鯨の契約獣が襲い掛かる。

その巨大な口を大きく開き、襲い掛かる。

鋭い牙が幾つも生えており、まるでナイフのようだった。

俺はなんとか身体を反らす事で、その攻撃を避ける事はできた。

だが、僅かに当たった装甲は火花を散らす。

同時に土の装甲に僅かだが傷ができていた。

「これは何度も喰らう事はできないなっ!」

言葉と同時に構えた先には既に壁の中へと鯨の契約獣は消えていた。

路地裏という地上のはずなのに、まるで鯨が獲物を狙うように。

映画を思わせる光景に周りを警戒する。

何時、どこから襲われるか分からない状況。ただ一つ言えることは、俺自身が狙われているということだ。

ただでさえ狭い通路の中で、何処から現れるのかわからない以上、迂闊には動けない。ただ待つことしかできない状況。

その矢先の事だった。

再び、殺気を感じる。

見ると地面から鮫の背鰭が見えており、今まさに噛みつきこうとしていた瞬間であった。

俺はすぐさま転がることで回避するが、今度はこちらから攻撃を仕掛ける事ができずにいた。隙を見せればまた別の場所に移動する事が分かっていたからだ。

そしてそれはあちらも同じだと言うことが分かっていた。だからこそ、お互いがお互いに出方を伺っている。

「だけど、どうする」

こちらからは、敵の姿を見つける事はできない。

対して、鮫の契約獣は、まさに何時でも襲える体制である。下手な動きを見せれば即座に襲いかかってくるだろう。ならば、このまま待ちの一手で行くべきか？

そんな考えがよぎったときだった。

「水中戦には水中戦で挑むしかないか」

同時に、俺はこの状況を打開できる物を探す為に覚悟を決める。

材料となる物は、この近くにあるスーパーか商店街にある。

道中で、誰にも襲われないように、素早く手に入れる事。

それが、今、行うべき事だ。

同時に俺がまず行つたのは手を伸ばす事だった。

路地裏の屋上まで、土の手が大きく伸びる。

伸びた手はそのまま屋上を掴むと同時に一気に飛ぶ。

バンジージャンプのように、大きく跳び上がる。

同時に宙へと浮かぶ事で、奴がどこから襲い掛かるのか分かりながら、目的地である

スーパーか商店街を空から探す。

そして見つけた。

「材料はあそこかっ」

同時に俺はそのまま再び手を大きく伸ばす。

それに合わせるように、屋上から鮫の契約獣が俺に向かって、襲い掛かる。

しかし、それよりも早く、俺は自分で出した勢いと共に飛ぶ。

向かった先は、目的地である商店街。

そこには魚屋だった。

「へい、らっしやいって、なんだあんたはあ！」

「おっちゃん、悪いけど、これで魚一匹」

何が起きているのか、分からない魚屋には悪いが、俺はすぐに財布から500円玉を取りだし、近くにあった魚を手にする。

同時に魚をソザイタマに変え、そのままもう一つのソザイタマをレンキンドライバーに装填する。

『フィツシユ！ ウォーターシューター！ マゼラレール』

「よつとー！」

そのまま、俺はすぐにレンキンドライバーを操作する。

同時に

『レーキン！ 水源のスナイパー！ マーマン！』

音声が鳴り響くと同時に、先程までがゴーレムをイメージする姿ならば、今はまさに魚を思わせる姿へと変わる。

その姿は、近くの鏡を見る限りだと、水色に魚をイメージさせた鎧。

両腕には腕部の固定式の水鉄砲が装着されている。

「やてつと」

同時に俺はすぐ近くまで迫っているだろう鮫の契約獣に対して、構える。

この姿になった事の影響か、空気中の水分の僅かな変化にも気付くようになったようだ。

はつとして振り返ると、そこには予想通りと言うべきか、ヤツの姿があった。

目の前までに迫っている鮫の契約獣に向けて、両腕にある水鉄砲を構える。

放たれた水の弾丸は、貫くまではいかないが、僅かにダメージがあつた様子が見られる。

そのまま俺は連続で放つていき、そのまま吹き飛ばす。

「牽制にはなんとかできるけど、これじゃ、戦闘にはならないなつと」

その言葉と共に、俺は懐から別のソサイタマを取りだし、そのままレンキンドライバーに装填する。

『ムカデ！ チェンソー！ カキマゼール！ レンキンカンリョー！ ムカデチェンソー！』

その音声と共に、俺の手にはムカデのような脚を模した百の刃が特徴的なチェンソー型武器だ。

片手で持てる程度の大きさだが、不気味な見た目と相まって禍々しい雰囲気放つているマシンだ。

こんなものが街中を走り回っていたら大騒ぎになるだろうなあと考えつつ、そのまま構える。

先程とは違い、この姿のおかげで鯨の契約獣の居場所は分かる。

あとは、どれだけ被害を出さずに戦う事だけだった。

そう考えていたが。

「きゃあああ！ 化け物だあ！」

「なんだあ、あいつは!!」

それよりも早く、俺の姿を見て、逃げる人。

その事に俺は思わず吹き出す。

「まあ、良いけど」

そうしながら、ムカデチェンソーを構える。

襲い掛かる鯨の契約獣に備えるように、俺はゆっくりと呼吸すると共に構える。

周りから、鯨の契約獣が襲い掛かるかどうか分からない状況の中、ムカデチェンソーにあるカバーを上部までスライドする。

それによって、巨大化する刃。

同時に、襲い掛かってくる鯨の契約獣に対して、俺はそのままムカデチェンソーを薙ぎ払う。

それと共に巨大なムカデを思わせる幻影が、鮫の契約獣を真っ二つに切り裂く。それによって、鮫の契約獣に向けて、ソザイタマを投げ、そのまま人間に戻す。「ふう、なんとかなったか」

そう落ち着く。

だが、同時に襲い掛かる衝撃。

俺はそのまま吹き飛ばされながら、見えたのは、別の契約獣だった。

「ぐっ」

戦いの疲れからの油断だった。

だが、俺はすぐにそのまま体勢を整えながら、襲ってきた奴を見つめる。

その容姿を見れば、何の魔女と契約したのか一目で分かる。

「ドラゴンって」

身体は紫色。

仮面はまるで龍を思わせるデザインとなっており、その手には先程、俺を攻撃したと思われる武器があった。

ドラゴンを模した杖であり、軽く回していた。

「お前か、最近暴れている仮面ライダー擬きの錬金獣は」

「そういうお前こそ、まるでスーパー戦隊みたいじゃないか」

そうして、俺はそのまま立ち上がる。

「そうか、だが、街を巻き込んだ戦いを起こした以上、容赦はしない」

その言葉と共に、俺に向けて、その武器を構える。

「えっ、いや、それは確かにそうなんだけど」

確かに魚のソザイタマを手に入れる為に向かったので、まさにその通りだ。

だが、すぐに俺は止めようとしたが、それよりも早く、奴はこちらに接近する。

「ぐっ」

すぐにムカデチェンソーを前に、その攻撃を受け止めようとした。

軽い反響音が聞こえるが、別方向から奴の蹴りが襲い掛かる。

「ぐっ」

そのまま地面に叩き込まれる前に、俺はすぐに二つのソザイタマをレンキンドライ

バーに入れる。

『クモバイク』

鳴り響く音声と共に、俺は召喚したクモバイクに乗る。

同時にクモバイクから伸びる糸で、そのまま走る。

「待てっ」

同時に、奴はその手に持った杖を変形させる。

まるでヌンチャクを思わせるそれを、近くの壁に向けて放つ。

放たれたヌンチャクの先は、まるでドラゴンを思わせる口があった。

壁を噛み付いたヌンチャクを持ったまま、真っ直ぐと俺に向かって行く。

クモバイクと同様に変幻自在に動いている。

「だけど、チャンスはあるようだな」

見る限り、奴の武器は、あの謎の棒だけ。

俺はそのまま新たなソザイタマを、レンキンドライバーに装填する。

『カボチャ！ 杖！ カキマゼール！ レンキンカンリョー！ ジャックオケイン！』

同時に鳴り響くと共に、俺の手にはカボチャを模した杖が出てきた。

そのまま俺は近くのマンホールを開け、そのままジャックオケインから火炎弾を放つ。

放たれた事で、水蒸気の煙が周囲の視界を覆う。

「なっ」

同時に煙をはらう。

「奴はどこにっ！」

くっ」

それと共に、奴はすぐに走り出した。

「ふう」

俺はそのまま下水道からすつと顔を出す。

奴は、このクモバイクの大ききで、惑わされた様子で、まさか下水道に逃げられたとは思っていないようだ。

「にしても、今日は酷い目にあつた」

そうしながら、俺は疲れた身体を引き釣りながら、軽い買い物しながら、家に帰る。  
「お帰り！」

あれ、凄い怪我だね！」

「酷い目にあつた」

そうしながら、俺はなんとか家に帰る。

「鯨の契約獣と戦つて、なんとか勝てたけど、その後、たぶん。

龍の契約獣だと思われる奴に襲われた」

「龍？」

龍つて、もしかして」

そうしていると、聞こえる音。

同時に、無造作に入つて来たのは、一組の男女だった。

「あなた達は」

「久し振りね、ルカ」

そう、片方の女性はルカに挨拶する。

もう片方はまるでヤンキーを思わせる格好をした男性だ。

どうやら、女性の方はルカと知り合いのようだが。

「あなたがルカの契約獣、いえ、この場合は仮面ライダーね。

私は龍の魔女、マリカ。

それでこっちは相棒のバン君よ」

「君付けは止めろ。

というか、てめえ、さつきはよくも逃げたなあ」

「あっさつきの」

そう言いながら、俺は後ろに目を逸らす。

同時に、向こうは殺気が強い。

「バン君、彼は悪人ではないわ。

それはルカも同じよ」

そう言いながら、ルカを見つめるマリカさん。

「マリカさん、お久しぶりです。

けど、一体、何の用でここに」

「あなたを連れ戻しに来ました」

「連れ戻しに？」

「それじゃ、ルカは死んじやうんじや」

「彼女は優秀な魔女です。」

「正義感もあり、契約したあなたも問題ありません」

「えっ」

「それだったら、なんで？」

「あなたは外道魔女を3人倒す事で、彼女の釈放を願うつもりですね」

「彼女？」

「その言葉に疑問に首を傾げる。」

「あなたが最高の魔女だとしたら、彼女は最悪の魔女。」

「泥の魔女、メタの」

「そう、これまで聞いた事のない名前に、俺は首を傾げる。」

## 進むべき決意は

龍の魔女と呼ばれる人物と、その契約獣の来訪から一時間後。

ソファに座っているルカは、これまでに見た事のない程に落ち込んでいた。

「それで、メタつて、一体誰なんだ？」

「それは、そのさっき言った通り、最悪の魔女だよ」

そう言いながら、ルカはゆっくりと話してくれた。

「性格は傍若無人でかなり口が悪くて、どんな手も使う卑怯な子だよ」

「聞いていた通り、最悪な人物のようだね」

「そうっね。」

けど、私にとっては、本音で話し合えるただ一人の親友だから」

「それが、助けたい理由か？」

「うん」

ルカは無言で頷く。

「ごめんね、嘘を言っちゃって。」

それでも、そのお願い！

私の親友の為に、一緒に戦って」

「良いよ」

「えっ？」

「何だよ、不思議そうな顔をして」

「だって、断るかと思つて」

そんなに信用されてなかつたのか。

俺がやる事なんて単純なものなのに、それに命まで賭けると言っているんだ。

それなら、当然答える言葉は決まっている。

俺は立ち上がりルカの前に立つ。

「なんで」

「別に。」

ただ、親友を助けたいと思つたルカを助けたい。

俺はそう思つただけだ」

ルカの目には涙が溜まっていた。

きつとこの子は今まで色んなものと戦つてきたはずだ。

その戦いの中で、多くの物を失つて来たに違いない。

そして今、友達を助ける為に覚悟を決めたんだろう。

だったら、それを全力で応援したい。

「ふふっ、レン君って、ただの陰キャだと思っていただけ結構いい男かもね」

「茶化すな。」

「こっちは真剣なんだぞ」

「そうだよね。」

「ごめんなさい」

ルカは深々と頭を下げる。

本当に律儀な奴だ。

そんな事をしなくても、協力すると言った時点でもう決まっていた事なのに。

ルカも顔を上げて立ち上がる。

「それじゃ、最後の鳥の外道魔女。」

その契約獣を倒さないとね」

「ああ」

俺は力強く返事をした。

「これは」

「もしかして、契約獣？」

「ええ、けど、たぶん違うと思うけど」

「とにかく、急ぐとするか」

俺はそのままクモバイクを呼び出し、そのまま向かって言った。

「変身！」

『レーキン！ 土で出来た頼れる奴！ ゴーレム！ コネクト！』

鳴り響く音と共に、俺はレーキンへと変身する。

目の前にいるブルドックの契約獣は、その巨体から繰り出される拳。

それは、土の鎧を身に纏っている俺でも完全に受けるのは危険だと思わせる程の威力だった。

「ぐっ」

放たれた拳をなんとか受け流し、そのまま後ろに跳ぶ。

同時に、ブルドックの契約獣の拳は地面に突き刺さった。

たった一撃で、簡単にアスファルトが砕け散る。

まともに食らえば、それこそ命はないかもしれない。

だが、俺もただ黙って攻撃を受けている訳ではない。

ブルドックの契約獣が拳を放つと同時に、こちらからも距離を詰めていたのだ。

そして、相手の懐まで潜り込んだ俺は、迷う事なく拳を振り上げた。

土で形成された腕は、自在に長さを変える事ができ、ブルドックの契約獣に一撃を簡

単に叩き込む事が出来た。

だが、それでも相手を倒すには至らない。

ダメージはあるだろうが、致命傷にはならないのだ。

やはり、契約獣としての経験の差か、相手は攻撃を喰らう事に躊躇いが無い。

このまま攻撃を続けなければいつか倒せるとは思うのだが、そうすればあの契約獣にも隙を見せてしまう事になる。

そうしている時だった。

「そんなので、勝てると思っっているかあ！」

「あっ！」

聞こえてきた声と共に、ブルドックの契約獣の上空にいた誰かが一撃を叩き込む。

その叩き込んだのは、間違いなく、龍の契約獣ことバンだった。

契約獣としての姿は、まるでカンフー映画をモチーフしたような中華服にドラゴンを思わせる仮面。

俺と似たような人型であるが、俺が仮面ライダーを思わせる姿だとすると、バンはスーパージ戦隊を思わせる姿だった。

その手には武器だと思われるヌンチャクを握りしめ、バンはそのヌンチャクを縦横無尽に振るっていく。

「おい、錬金の契約獣」

「俺には仮面ライダーレーキンという名前があるんだが」

「どうでも良いよ。」

まったく、こんな雑魚に手間取りやがって」

そう俺を馬鹿にするように言った後に、バンは再びヌンチャクを振るう。

先程よりも早く振られたヌンチャクは、確実にブルドックの契約獣を吹き飛ばすように直撃させる。

そうして吹き飛ばされたブルドックの契約獣を見た後、俺は思わずバンの方を見てしまふ。

これまで、一人で戦ってきた事もあって、バンとどうやって連携を取ればいいのか解らなかつたからだ。

しかし、そんな心配は一瞬で消し飛ぶ事になった。

何故なら、目の前にいたはずのバンがいなくなっていたのだ。

一体何処に行ったのかと思ひ辺りを見渡せば、それはすぐに見つかった。

バンは素早く移動すると同時に、既に攻撃に入っていたのだ。

その手に握られているのは、棍棒のような物であり、それを勢いよく振り下ろす。

だが、ブルドックの契約獣は地面に倒れながらも腕を構えて防御しようとする。

当然の行動だろう、なんせ殴られたら痛いし下手したら死ぬかもしれないしな。

だからこそ、それを読んでいたかのようにバンの動きが変化する。

両腕を大きく広げた状態で、バンは腰を落としながら動き出す。

そして、まるでその場で一回転するようにしながらヌンチャクを振り回し始めたのだ。

その姿はあたかも竜巻のようにも見える中、ヌンチャクの鎖部分が蛇腹剣のように伸びていく。

そして、ヌンチャクの先端部分はそのまま真っ直ぐブルドックの契約獣へと向かっていった。

鞭のように伸びたヌンチャクが、一直線に向かっていくという事はつまり、それだけ威力が高いという事でもあるのだ。

しかも、ブルドックの契約獣はまだガードの姿勢のまま動かないのだから尚更である。

そして、ヌンチャクはそのままブルドックの契約獣の腕に巻きつき、締め上げ始めた。腕を封じられてしまった事に驚きの声を上げるブルドックの契約獣だったが、そんな彼に構わずバンは更に動く。

今度は右腕だけではなく左腕も同じように拘束する。

「さあ、これで終わらせるぜえ！」

バンは叫びながらヌンチャクを引つ張った。

それによつてブルドックの契約獣の体勢が崩れそうになった瞬間、再びバンダナは回転する。

そして、また勢いをつけてからヌンチャクを引つ張り始めると、そのままブルドックの契約獣を投げ飛ばしたのだ。

投げ飛ばされたブルドックの契約獣を見て、少しだけ驚く。

だが

「なっ」

バンは驚きの声を漏らす。

それは拘束していたブルドックの契約獣が、あろうことかバンの手から逃れていたからだ。

あれだけの力で引つ張っていたにも関わらず、抜け出されてしまった事に驚いているようだ。

そんな決定的な隙を見せた事で、バンの目の前でブルドックの契約獣が拳を振り下ろす。

「なっがあああー！」

咄嗟の判断だったのか、バンはその攻撃を受け止めようと両手を前に突き出した。

しかし、勢いを完全に殺せずに地面を踏みしめてしまい、その場に足を止めてしまう。だが、それでも彼は前になる事を躊躇わなかった。

すぐさま体勢を整えて、逆に前が出る。

そして、攻撃された手とは逆の手で、ブルドッグの契約獣の腕を掴むと力任せに投げ飛ばした。

その一連の流れの中で、確かにバンの攻撃は命中していたはずだ。

しかし、ダメージを受けている様子はない。

「まったく、少しは考えろよな！」

『タイガー！ ニンジャ！ マゼラレール』

俺は瞬時に二つのソザイダマをレンキンドライバーに入れ、そのまま走る。

『レーキン！ 獰猛なアサシン！ ジンコー！』

同時に、俺は忍者を思わせるアーマーを身に纏うと同時に、ブルドッグの契約獣を蹴り上げる。

「ぐっ!!」

ブルドッグの契約獣は、その攻撃を受けて、すぐに後ろへと仰け反る。

「まったく、少しは考えろよな」

「うるせえ！ あのメタを釈放させようとしている魔女の契約獣の手なんて」

「今は、あいつを倒すのが先決だろ」

そう、俺はブルドックの契約獣を指差す。

「ちっ、今だけだぞっ！」

その言葉と共に、バンの奴もまた手元に戻ってきたヌンチャクを構える。

同時に俺も、このジンコーに備わっていた忍者刀を手に取り、構える。

お互いに武器を構えてから、ジリジリと睨み合う。

そんな状態で数秒ほど経つと、やはり向こうの方が先に動いた。

先程と同じように、殴りかかってきたのだ。

俺はその攻撃を横に飛んで避け、奴の身体を足場にして

空中に飛び上がる。

そして、今度は上から攻撃を仕掛けてくる。

それに対しては、忍者刀を使い防いだのだが。

どうやら、さつきまでのパンチとは違って、力が籠っていないようだった。

こちらの攻撃を防ぐ事に關しては問題がないらしいが、明らかに威力が下がっていた。

「さつきのダメージが効いているようだな」

そう、バンはニヤツとした顔を浮かべながら言ってくる。

実際そうなんだと思うが、認めたくない。

だけど、だからと言ってこのまま黙っている訳にもいかないだろう。

「さっさと決めるとするか！」

『レーキンフルオープン！ ジンコーストライク！』

その音声と共に、忍者刀に稲妻を流し込み、全身を虎のエフェクトに変換する。

同時に目にも止まらぬ速さでまるで分身しながら、ブルドックの契約獣に向かって行く。

「まったたくよ！ 手が早いんだよ！ ドラゴクラッシュ」

『ドラゴンクラッシュ！』

鳴り響く音声と共に、バンのその手に持つヌンチャクから巨大な龍のエネルギーが真つ直ぐとブルドックの契約獣に襲い掛かる。

その一撃はまさに竜の様な形をしており、とてもじゃないけど避けられるようなものではない。

しかし、それが直撃する前にブルドックの契約獣はその巨体を浮かび上げさせ、大きくジャンプする。

あれだけの大きさであるにもかかわらず、その速度はかなりのモノであり、正直反応できなかった。

そんなブルドックの契約獣に追撃するように、俺と、その分身達は次々と噛み付いていく。

それはもはや、攻撃というよりも捕食に近い行為であった。

そうして、全ての攻撃を受け、耐えきれず、爆散する。

「ふう、なんとか倒せたか」

「ちっ」

それと共にバンはそのままヌンチャクをこちらに向ける。

「さて、次は」

「悪いけど、あんたとは戦うつもりはないんだよ。」

それに、目的は鳥の契約獣だからな」

「外道魔女のか」

「それでメタを助ける」

「あいつが解放されたら、どうなるのか分かっているのか？」

「さあな。」

「けど」

俺はそのままバンを見つめる。

「友達が助けたい親友だ。」

だったら、助けてやるのに、何の迷いがあるんだ」

「お前」

「それじゃ、ここにでな」

同時に俺はそのまま走り出す。

「なっちっ」

後ろでバンの声を無視しながら、俺はそのまま逃げていく。

## 魔女の刺客

その日は、普段と変わらない日常だった。

未だに鳥の外道魔女の行方を見つける事はできない。

これまでの戦いで外道魔女はすぐに見つかると思っていたが、案外見つからない。

「それは、普通に見つからないだろ」

「それで、お前はなんで当たり前のようにいるんだ」

俺は目の前で当たり前のように昼食を食べているバンに言う。

それと共に彼は

「お前が変な行動を監視するのも仕事だからな」

「いや、それでカレー食べないでくれる。」

私の食べる量が減るじゃない」

「いや、ルカも結構食べているからな」

そう、俺は呆れたように言う。

「それに、そろそろ奴も動き出す」

「動くって、誰だ？」

「それは」

そう言っていると共に何かを感じた。

「これはまさかつ」

「おいつ」

感じた気配と共に、俺はすぐに走っていた。

これまで、幾度も感じた直感と共に走り出す。

「おいつ、まったく、このままじゃやべえのに」

そう、バンの声が聞こえたが気にせずに向かった。

そうして向かった先には巨大な影が見えた。

その容姿から見ても、おそらくは蛙である事は間違いないだろう。

レーキンへと変身した俺が始めに行ったのは、腕を巨大化させて目の前にいる蛙の契

約獣を殴ろうとした。

だが、それよりも早く、蛙の契約獣はその攻撃を簡単に避ける。

軽々と人を超える力を持っているはずの、この巨大で太い拳を避けるなんて芸当が出来るとは思わなかった。

だけど、驚いたのも一瞬の事だった。

俺はすぐに攻撃の軌道を変えて、もう一度拳を振るう。

——その拳を再びかわす蛙。

ただ、今度の回避はさつきよりも素早かった。

しかも、ただ攻撃を避けるだけではない。

その背中にあるだろうボールをこちらに向けて投げていった。

それ程、勢いはなく、むしろ周りに散らばるように。

放たれたボールが迫る。

だが、そのゆつくりと迫るボールに俺は危機感を覚えた。

すぐに身体を覆うように土の壁を覆う。

それと共に襲い掛かる衝撃。

「ぐっ」

同時に土の壁が崩れながら、俺はそのまま後ろに下がる。

見ると、そこにはボールが落ちたと思われる箇所が爆発したと思われる箇所があつ

た。

「爆弾かよ」

ボールを模した爆弾。

それが蛙の契約獣の攻撃方法だと分かると共に、やはり戦い方を理解している事が分

かった。

恐らく、あの蛙の契約者は頭が回るタイプだなと判断する。

しかし、だからといってどうにもならない訳ではない。

確かに手強い相手で、油断するとやられる可能性だつてある。

その為には、まずは相手との距離を離さないと話にならない。

そう考えて、俺は土の道を作り上げると同時に、それを一気に駆け出した。

そして、走りながらも右手を突き出し、土の拳を伸ばす。

それに対して、蛙の契約獣は即座に反応して、避ける。

蛙の契約獣の頭上を通り過ぎる魔力弾。

けれど、それは予測済み。

だからこそ、次の瞬間には先ほど作り出した土の道から飛び出して、そのまま空中にいた契約獣に向かって、飛び蹴りを放つ。

宙を蹴つたような感覚とともに、速度を上げて敵に迫る一撃。

しかし、それでもぎりぎりまで引き付けてからの回避行動によって、避けられる。

だが、それで終わりじゃない。

着地と同時に、俺は懐からソザイダマを取り出す。

『ワシー！ ロウソク！ マゼラレール！』

その音声と共に、俺はその姿を変える。

『レーキン！ 無謀な飛行！ イカロス！』

その音声と共に、俺の背中からは翼が生える。

その翼は、蠟燭で出来ている為か、ふわふわとしていて頼りない物だった。

「さて、行くぜ」

その言葉と共に、こちらに向けて、再びボール型爆弾を放っていく。

それに対して、背中にある蠟燭の一部をまるで弾丸のように放つ。

放たれた蠟燭の弾丸が爆弾に触れるとその部分を爆発させる。

それによって、軌道が変わった爆弾が向かってくるのを見て、俺は一気に翼を動かす

事でその場から離れる。

爆風の風を受けながら、俺はそのまま空を飛ぶ蛙の契約獣に向かって、飛ぶ。

そのまま相手の腹を狙って右足を前に出して蹴りを入れる。

もちろん、そんな攻撃に当たってくれる訳がなく、直ぐに蛙の契約獣は空へと飛んで

いた。

そして、そこでお互いが向かい合う形になる。

そのまま俺に向かって、蛙の契約獣は、背中にあるボールを投げようとした。

だが、それよりも俺は蠟燭を真っ直ぐと放つ。

「っ!!」

蠟燭の蝋が、蛙の契約獣の背中を焼ける。

同時に、蛙の契約獣は、ボールを取る事ができない。

『レーキンフルオープン！ イカロスストライク!』

同時に上空にて俺の身体を軸に蠟燭の翼で全身を包み、白い錐のような姿となって激しくドリル回転しながら敵に急降下突撃し、蛙の契約獣に激突した。

——ドオンツ!! 激しい音を立ててぶつかり合い、敵の装甲を破壊していく。

そして、それと同時に蛙の契約獣もかなりのダメージを負ったのか、そのまま地面へと墜落していった。

それと共に、俺はソザイダマで蛙の契約獣の力を回収する。

「ふう」

ゆっくりと、俺は戦いを終え、そのまま解除しようとした時だった。

カシヨツ……カシヨツ……と、特徴的な足音が鳴り、振り返る。

そこには一人の契約獣がいた。

全身は薄いガラスを思わせるものを身に纏う。

その内部は人間の内臓が僅かに見える。

「お前が噂の錬金の契約獣か」

「お前は？」

「俺はホムンクルスの契約獣。」

「お前が泥の魔女を解放しようとしているな」

「だとしたら」

「ここで潰す」

その言葉と共に、ホムンクルスの契約獣が襲い掛かる。

## ホムンクルスとの知恵比べ

「ぐっ」

目の前に突然現れた存在からの一撃。

それは、俺を吹き飛ばすには十分過ぎる程の威力を持つ攻撃だった。

先程までの戦闘のダメージを残ってはいるが、それでも十分過ぎる程に強敵なのが、防御した腕のダメージからでも十分に伝わる。

「泥の魔女を復活させるお前には、ここで消えて貰う」

そう言いながら、目の前にいる契約獣はそう呟きながら、ゆっくりと近づく。

全身を透き通るガラスを思わせる身体。

人型である事は分かる程度で、その容姿を一言で言えば人体模型である。

ガラスの中には、人間の臓器だと思われる部品がよく見える。

「お前は一体」

「俺は、そうだな。」

一言で言えば、ホムクルスの契約獣だ」

「ホムンクルス」

ホムンクルス。

俺の中で分かる簡単な知識としては、人造人間。

錬金術によって作り上げられた人間の技術の一つ。

生まれながらにしてあらゆる知識を身に付けているという。

その事を考えれば、目の前にいるホムンクルスの契約獣の能力はおそらくは。

「嫌な予感はあるがっ！」

その言葉と共に、俺はすぐに地表で錬成した無数の土の腕を真っ直ぐとホムンクルスの契約獣に向かって殴りかかる。

それに対して、ホムンクルスの契約獣は、まるで予測したように、攻撃を受け流す。

そのまま真っ直ぐと俺に近づきながら、殴りかかる。

俺は瞬時にその攻撃を受け止めるように防御する。

だが、その拳は、俺に大きなダメージを与える。

「ぐっ」

そこは、まるで俺の防御した箇所でも最も弱い箇所を狙うように。

さらに、そこから追撃するように、次々と拳を繰り出す。

それに合わせるように、俺も反撃するために攻撃を仕掛けるが、奴の方が明らかに早い。

防戦一方で、このままだと押し切られてしまうかもしれない。

「いや、これは早いというよりも」

「予測、それは正しい」

同時に、俺をそのまま腹部に強い衝撃が走る。

それはホムンクルスの契約獣による蹴りであった。

「この姿になっている間、予測から最適解を選び出し実行しているのだ」

吹き飛ばされた俺に対して、容赦なく追撃を加えようとする。

俺は何とか態勢を立て直すために地面に着地をすると同時に、回避行動に移る。

しかし、それも既に読んでいたように、地面に落ちていた土の拳を蹴り、俺に向けて放つ。

それに対して、俺は防御する事ができず、まともに攻撃を喰らう。

それによって、更に大きく後方へと飛ばされる事になる。

それでもまだ、辛うじて意識があつた事に驚きながらも、どうするかを考える。

(さすがに強すぎる)

俺の考えとしては、まずはこの場から離れる事が最優先になるだろう。

あのホムンクルスの契約獣がいる限りは逃げる事は厳しいだろう。

「もう一度言う。」

泥の魔女の復活は諦めろ」

「それはできないな」

「なぜだ」

そう言いながら、ホムンクルスの契約獣はゆっくりと俺に問いかける。

「こちらの世界でのお前の活動は私は僅かだが確かに見た。

人々に害する契約獣のみと戦う。

既に戦った外道魔女の契約獣に関しても、戦った理由には納得できる」

そう言いながらホムンクルスの契約獣はゆっくりと問いかける。

「お前は契約獣の中では、大きく善な存在。

ならばこそ、なぜ、あそこまで邪悪な存在を復活させようとする」

ホムンクルスの契約獣はそう、俺に言ってくる。

「そんなの決まっているだろ」

俺はそう言いながら、ホムンクルスの契約獣に向けて言う。

「ルカが友達を助けたい。

だったら、俺は彼女を信じる。

それに、まだ会った事のない奴が本当に悪いかどうかなんて、知らないからな」

「……どうやら、善ではあるが、同時に無知であるようだ。」

ならば、ここで力を失わせて貰う」

そう言いながら、ホムンクルスの契約獣は再び走り出す。

奴は、これまで戦った契約獣とは違い、特殊な能力はほとんどない。

ガラスによってできた頑丈な身体に、ほとんど未来予知に近い知識。

それらは確かに対処しにくい。

けど

「だったら、ここからは無茶苦茶にやらせてもらおうぜ」

同時に俺は懐から取り出したソザイダマをそのままレンキンドライバーに装填する。

「姿を変えた所で」

『ワस्पエアロ』

「なっ!」

奴は俺が姿を変えろと思っていただろう。

だが、実際に行ったのは、スズメバチの要素を持った1人乗りの小型ヘリ、ワस्पエアロを召喚した事だった。

これまででは、あまり見せた事のない手だから。

そうしながら、俺はそのままワस्पエアロに乗りながら、そのまま空を飛ぶ。

「空を飛ぶ程度で」

そう言いながら、ホムンクルスの契約獣はそのまま近くにある建物を踏み台にして、俺の近づこうとする。

『ハエロボット』

今度はレンキンドライバーから出てきた無数のハエ型ロボット。

そのまま、近づいてくるホムンクルスの契約獣に襲い掛かる。

「この程度！」

そう言いながら、空中でハエロボットを次々と殴つていく。

同時に、ワस्पエアロに乗り込む。

だが

「いない、だどつ」

『コウモリマント』

その音声と共に、俺の背中にはコウモリマントを纏う。

それによって、空を飛ぶ事ができた。

『キリンクレーン』

同時に召喚したキリンクレーンごと奴に向けて、落とす。

「なっ！」

そのままワस्पエアロに乗り込んでいる奴ごと、キリンクレーンで突っ込む。

すぐにホムンクルスの契約獣はその場で脱出したのを見える。

「知識があっても、空では無防備だ」

それと共に、俺は真つ直ぐとホムンクルスの契約獣に向かって、狙いを定める。

『レーキンフルオーブン！ ゴーレムストライク！』

鳴り響く音声と共に、俺はそのまま真つ直ぐとホムンクルスの契約獣に向かって、真つ直ぐと拳を振り上げる。

巨大化した拳を目の前にして、ホムンクルスの契約獣はすぐに防御するように腕をクロスさせる。

だが、避ける事のできないホムンクルスの契約獣はそのまま地面へと叩きつける。

「ぐっ」

ビシリッと、ガラスが僅かに割れるような音が聞こえる。

それで、俺は攻撃を止める。

「なぜ、止める？」

「あんたは、敵じゃないから」

俺はそう言いながら、息を整えながら見つめる。

「俺は、馬鹿だから、ルカが助けたい思いを確かに叶えたい。

だけど、もしもあんたの言う通り、泥の魔女がとんでもない悪人だったら」

そう俺は真つ直ぐと見つめる。

「俺がなんとかする。」

命に代えてもな」

「……なぜ、そこまで錬金の魔女に命を賭ける」

その言葉に対して、俺は

「友達であり、俺をここまで変えてくれた。」

だからこそだ」

そう答えた。

それに対して、ホムンクルスの契約獣は。

「そうか。」

だが、ならばお前の邪魔をこれからする」

ホムンクルスの契約獣は変わらない言葉を続ける。

「お前が契約獣と戦うならば、協力しよう。」

だが、外道魔女の契約獣の時は、お前が倒す前に俺が倒す」

「どっちが早いかどうか。」

そういう訳か」

その言葉と共に、俺はそのままホムンクルスの契約獣から離れる。

同時に向こうもまた敵意がない様子で離れる。

「色々と厄介な事になりそうだな」

それでも、俺は目的を果たす。

その為に、戦い続けよう。

## 危険な組み合わせ

「このままじゃ、駄目だよなあ」

そう言いながら、俺はこの前の戦いを思い出す。

ホムンクルスの契約獣との戦いにおいて、俺は苦戦しながらも、なんとか勝利する事はできた。

しかし、それは本当に奇跡的な勝利であり、これからも通用するとは限らない。

「それで、どうするつもりなの？」

「……それが思いつかないからねえ」

そんな考えで、首を傾げる。

「……なあ、レーキンでこれまで素材にしてきたのは、ほとんどは玩具とか、危険の少ない奴なんだよね」

「それは、そうだよ。」

危険な物は、それ相当のリスクがあるから。

あのクレーンやヘリコプターも、元は玩具だったからね」

前回使った奴を含めて、ソザイダマの多くは危険が少ない物ばかりだ。

だからこそ、力は安定して使えた。

「だったら、危険な物だったら「駄目だよ」っ」

俺がそう言うのと、彼女は詰め寄る。

「錬金術は失敗する危険性もある。

未だにレーキンでの変身がどれほど危険なのか、分からない以上、リスクは背負うべきじゃない」

「だとしても、これからの戦いには、そのリスクを背負って戦わなければいけないだろ」

「それは、そうだけだ」

「まあ、どちらにしても、そんな都合の良いのは」

そう言いながら、俺がソザイダマを弄っていると、地面に転がる。

そこは丁度、電池がある所だった。

俺はすぐにソザイダマを取ると。

「んっ何か入って、えっ」

ソザイダマに入っていたのは、水銀だった。

ふと見ると、どうやら電池の一部が溶けていたらしい。

なぜ、その状況に。

「どうしたの？」

「いや、なんでもっ」

同時に感じた違和感。

それは、何時もの契約獣が暴れた時にある感覚。

「悪い、契約獣が出たみたい!!」

「えっちよっ、レン!!!」

俺は、彼女の言葉を無視して、すぐに向かった。

向かった先には、既に契約獣が、街を暴れていた。

その身体は

「ぐっー」

俺はすぐに仮面ライダーへと変身すると同時に、その手を地面に置く。

瞬時に地面にある土は大きな拳となって、真っ直ぐと目の前にいる鋼の契約獣に向

かって攻撃する。

怒濤の土の拳によって、何度も攻撃を叩き込む。

叩き込まれた攻撃に対して、鋼の契約獣は確かに当たった。

しかし

「おいおい、マジかよ」

その身体には、傷一つついていなかった。

同時に、その怪しく光ると同時に、真つ直ぐと俺に襲い掛かる。すぐに土で腕周辺に集めて、即設の盾を作り出し、受け止める。

「ぐっ！」

だが、土の盾は簡単に碎け散り俺を吹き飛ばす。

そのまま地面に転がった。

すぐに体勢を立て直す。

全身から血が流れる。

まづいな。

あの一撃だけで分かった事がある。

それは奴の方が、俺よりも確実に強い事だ。

自在に土を操る事ができるこの姿。

だが、向こうの鋼の契約獣はその名の通り、まさしく鋼を自在に操る事ができる。

操れる範囲はそれ程多くないが、見れば奴は自分の腕を鋭い剣へと変える。

そしてそれを飛ばせばそれだけで簡単に強固な岩さえも切り裂く事が出来る。

更にはその鋼鉄も自由に形を変えてまるで生きているかのように動かせる事も出来るようだ。

そう、見ている間にも、鋼の契約獣はその腕を真つ直ぐと俺に向けて伸ばす。

瞬間的に後ろに飛ぶ。

次の瞬間には先ほどまでいた場所が大きな音を響かせる。

地面は大きく割れていた。

それだけでも、その剣の威力が分かるといふものだ。

だが同時に思う。

確かにこいつは強敵かもしれないが勝機がない訳ではない。

「だとしたら、何を選ぶかだ」

俺はそう言いながら、周りの物を見る。

手元にある物と組み合わせるのに最も相性が良いもの。

それは何かを考える。

今の状況では相手の攻撃を防ぐ手段はない。

ならばどうするか？

考える時間はそこまでない。

既に相手はこちらに攻撃を仕掛けてきているからだ。

だがそれでも考え続ける。

その時だった。

「あれはっ！」

視界の端に見えた物に目を向ける。

「もしかしたら、あれとこれを組み合わせた姿ならばっ！」

そうと決まれば、すぐに取りに行く必要がある。

しかし、それを阻止するように、目の前にいる鋼の契約獣は立ち塞がる。

「邪魔をするなっ！ お前の攻撃なんてもう当たらないんだよっ!!」

叫びと共に土の拳を作り出す。それをまっすぐと向けて放つ。

一直線に向かってくる拳に対して、相手はすぐに剣に変えるとその攻撃を受け止める。

当然のように吹き飛ばされるが、それでいい。

俺はその間に目的の物を拾い上げる。

手の中にある物は蜥蜴。

どこにでもいる普通の蜥蜴だ。

しかしこれが俺にとっては非常に重要な物となる。

俺はそのまま蜥蜴をソザイダマに入れると共に、そのままもう一つのソザイダマと一緒にレンキンドライバーに装填する。

『蜥蜴！ 水銀！ マゼラレール！』

「よっよっ！」

俺はその音声を確認すると共に、そのまま操作を行う。

『鍊丹の竜！ 黄竜！』

鳴り響く音声と共に、俺の全身は熔ける水銀の鎧を身に纏う。

相手が、鋼ならば、こちらは水銀で対抗する。

そう思った時だった。

「ぐっ！」

水銀の影響なのか、酷く頭痛がする。

これは一体どういうことだ。

自分の身に起きている事に戸惑っている間にも敵の攻撃は続く。

先程と同じように腕を剣に変えて連続で斬撃を放つて来る。

それに対してこちらも同じように水銀の壁を作る事で防いだが、その度に激しい痛み

に襲われる。

思わず膝を着く。

「お前つ邪魔なんだよお!!」

同時に、身体から流れ出た水銀を、円形に固めると共に、そのまま鋼の契約獣に向け

て放つ。

放たれたそれに対して、鋼の契約獣はすぐに避ける。

僅かに当たった箇所は、水銀によって、鋭く斬られていた。

それにはさすがに鋼の契約獣も焦りが見えた。

しかし、俺はそのまま防御に使っていた水銀の壁に手を触れる。

すると、先程までの巨大な壁となっていた水銀の壁は巨大な剣へと変わる。

大きき的には相手の身の丈を超える程の大太刀といったところだろう。

俺はそれを握り締めると一気に振り下ろす。

対する相手は即座に避けると同時に剣を構える。

だが俺は気にせずに叩きつける。

叩きつけられた事によって、鋼の契約獣はその身体を真つ二つに斬られる。

既に戦闘は行えない状態である。

だが

「あつあああ!!」

衝動が抑えられない。

目の前にある敵を徹底的に攻撃しなければいけないという衝動である。

そんな状態のまま、俺はもう一度水銀の壁を作りだすと、それを叩きつけていく。

既に何も言わない。いや、喋る事ができないのだ。

ただひたすら目の前にいる敵に対して攻撃をしていくだけだ。

「レン」

聞こえた声、それと共に俺は手が止まる。

それと共にベルトからソザイダマが落ちる。

「ルカ、俺は一体」

「水銀の毒にやられたんだよ。」

他のよりも危険性があるからね」

そう言いながら、水銀が入ったソザイダマを回収する。

それにより水銀による副作用は消えたようだ。

「それより大丈夫？」

そう言われて初めて気付いた。

自分が涙を流している。

「俺は、結局はこうなるんだな」

「どうしたの急に」

「この姿になってから、自分の意志に反して体が動く事が多かった。

感情的になって行動していた事もあった。

でも今回だけは違ってたんだ……力に振り回されて」

水銀の毒のせいとはいえ、俺はここまで残酷な事を平然と行えるようになっていたの

かと思うと恐怖しかなかった。

「仕方がないよ。」

「これは本当に危険だった」

「だけどこんな俺には」

「確かに今回の件で君は色々としょつくだったかもしれないだったが、安全に使えるようにすれば良いんだよ」

「安全にだど?」

その言葉に俺は首を傾げる。

「錬金術は不完全な物質からより完全な物質を生み出すそうとする。」

「だったら、この水銀の力だって、危険な物から有益なものに変えれば問題はないと思うんだけどね」

「……………」

「君のアイディアだけでは駄目かもしれない。」

「私だけの知識だけでも無理かもしれない。」

「けど、二人が合わされば、それは可能かもしれない、かも」  
「そう呟いたルカは少し恥ずかしげにしているようであった。」

「まあ、何だかんだ言っても、君にしかできない事だから」

「そうだな……」

もうこれ以上悩む必要はないようだ。

そして俺は改めて思う。

(俺はまだ弱い)

だからこそ強くならないといけない。

これまででない組み合わせを。

水銀の力を十全に、危険じゃない方法を探る為に。

「さあ、続きを始めましょうか」

「ああ」

そうして、俺達はそれと共に、新たな力の使い方を開拓していく事にした。

## 銀龍を纏い

仮面ライダーレーキンは素材を納めたソザイダマの組み合わせで、様々な姿・武器を作り出す事ができる。

それは、錬金術士のように、様々な素材で戦う事ができる。

しかし、その中で、今、最も大きな課題が目の前にある。

「水銀。」

これをどう使うかだよな」

水銀は、その危険性は高く、水銀を使った姿では暴走してしまう。

だからこそ、俺は首を傾げる。

「まず、暴走を抑えるには、どうやって水銀の毒素を抑えるのか。

それに対抗できる物が必要だと思うの」

そう言いながら、ルカは目の前にある多くの素材を並べる。

水銀の毒素を中和する為の素材。

それと共に、水銀の力を十全に使う為に必要なアイテムも必要だと言う。

「そうだな……」

「うーん」

俺とルカは次々と素材を見ていく。

水銀の強みを残しつつ、暴走の危険性を極力少なくする物。

その組み合わせは意外に難しい。

そもそも、この水銀は毒性が高いのだ。

それを防ぐには。

「・・・待てよ」

そこで、俺はある事を思い出す。

「なんで、今まで試さなかったんだ。

いや、違う。

これまで、俺は固定概念に縛られていたんだ！」

「どうしたの？」

「もしかしたら、見つけたかもしれない。

水銀の力を十全に使える方法を」

それと共に、俺はとあるソザイダマを取り出す。

「これがあれば」

「っ」

それと共に、レンは何か寒気を感じた。

その予感ほまさに的中したと言うべきか。

窓が震えていた。

その方向を見れば、そこには巨大な何かがあった。

「あれは」

「鳥の契約獣。

最後の外道」

同時に、それが最後の鍵となる存在の出現だと分かる。

「ならば、行くしかない」

俺はその言葉と共にクモバイクを呼び出し、そのまま乗り込む。

クモバイクによる走り、ようやく辿り着いた先。

そこには、近くにある建物を遙かに超える大きさの巨大な鳥だった。

鋭い牙はどんな物で斬り裂き、大きく広げた翼だけでも、巨大な影が出来る。

それ程の大きさを誇るそれは、まさしく鳥の契約獣だった。

「どうやら、まだ来ていないようだな」

周りを見れば、まだあいつらが来ていない。

ならば、早々に決着をつける必要がある。

俺はそのまま腰にあるレンキンドライバーにソザイダマを入れる。

『レーキン！ 土で出来た頼れる奴！ ゴーレム！ コネクト！』

既に何度も変身したその姿。

だが、本番はこれからだ。

俺はその手に、二つのソザイダマを取りだし、入れる。

『蜥蜴！ 水銀！ マゼラレール！』

これによって、既に変身するだろう。

だが

「まだだ」

『剣！』

俺はそのままソザイダマをもう一つ追加する。

流れる音声と共に、俺はそのままレンキンドライバーを操作する。

『レンキンカンリョー！メタルドラゴンソード』

鳴り響く音声にレンキンドライバーから出てきた武器。

それは、銀色のドラゴンを模した剣であり、軽く振るうだけでも水銀が地面に落ちる。

同時に、俺の右上半身など一部がドラゴンを思わせる装甲を身に纏う。

鳥の契約獣は、それに疑問を持ちながらも、真っ直ぐと俺に向かって襲い掛かってく

る。

「さあ、実験を始めようか」

俺は、その手に持つ剣、メタルドラゴンソードを構え、振り払う。

それと共に刃先から高密度の水銀を放出することで斬撃そのものを巨大化して飛ばした。

それは鳥の契約獣にとっては予想外の一撃だったらしい。

咄嗟に回避した。だが、それで済ませるほど甘くはないぞ。

「まだまだ!」

追撃の一閃を放つ。鳥の契約獣はその身を捻り避けるが僅かに掠ったらしく翼に傷が入った。

そこから流れた血によって、銀の水飛沫が発生する。

(これは思った以上に相性がいいかもしれない)

俺が持つこのメタルドラゴンソード。

本来なら金属で出来たものを溶かす水銀を操作するために造られたものなのだが……。

普通なら触れることもできないような超高温な物質も自在に操れる。

そして、暴走する心配もない。

俺はその事に笑みを浮かべながら、上を見上げる。

先程と同様に鳥の契約獣は空中にいる。

そこで、俺は再び水銀を操作して、それを足場にして飛び上がった。

鳥の契約獣も流石に驚いたようだが、まだ甘い。

俺は、水銀を使って鳥の契約獣の上に陣取るように移動を行うと、そのまま急降下を行って勢いをつけ、思いつき斬りつけた！

——ズシャアアア

地面が大きく割れ、衝撃による煙が巻き起こる。これで倒したか？

……そう考えた瞬間だった。

背後からの気配を感じとり、振り返る。

それは鳥の契約獣が、その爪を真っ直ぐと俺に向かって、襲い掛かる。

俺は瞬時に地面にメタルドラゴンソードを突き刺す。

それと共に地面の土と、メタルドラゴンソードの水銀が混じった壁が構築される。

それによって、鳥の契約獣の攻撃は完全に防ぐ事ができた。

「金属と土を合わせる事ができるのか。

だったら！」

俺はそのままその壁を巨大な槍に形成し直す。

そしてそのまま上空へ放り投げる。

それに対して、相手は回避しようとしたらしいのだが、それよりも速く槍が鳥の契約獣を貫き大穴を空ける事に成功した。

それによって、よろめく鳥の契約獣。

「悪いが一気に決めるぜ！」

その言葉と共に、槍に混ざっている水銀を集める。

同時にその水銀を上空に集めると共に、俺も構える。「いくぜ……………」

「グウウ!!」

何が起ころるか察したらしく、鳥の契約獣も逃げるべく翼を広げようとする。

だがもう遅い！

「喰らえええ!!」

集めた水銀をそのまま高速回転させる事で竜巻を発生させた。

その形はまるでドラゴンを思わせた。

その竜巻はそのまま鳥の契約獣を包み込む。

それによって、鳥の契約獣は完全に動きを止める。

同時に俺もまた、必殺のライダーキックを繰り出していた。

「ライダー……………キイイイクツ!!」

ドガアアツンという音を立てて、レーキンと鳥の契約獣にぶつける。それにより激しい衝撃が発生。お互いの身を大きく仰け反らせていく。やがて、鳥の契約獣がそのまま宙へと浮かぶ形で飛ばされていった。そして、そのまま壁に激突する事により、ようやく止まる事が出来た。一方で俺も着地に成功。

だが、それでも身体にはダメージがあつたようで苦悶の声を上げる。

だが、それと同時に鳥の契約獣も倒れ伏していた。

「倒せたのか」

同時に俺は変身を解除させる。

「無事だったの!」

そうして、俺が倒した頃、ルカが俺の元へと辿り着いた。

「ああんとか」

「けど、どうして」

「なに、仮面ライダーが教えてくれたんだよ。

暴走には暴走を抑制するアイテムだって」

「それが、さっきの?」

「まあ、毒素がこちらに来る前の短期決戦だけだね」

実際に、戦闘中に僅かに見えたが、戦闘が進む度に、水銀が浸食するように装甲が増えていた。

つまり、あれは強化すると同時にタイミリミットを表している。

「それでも、なんとか」

「どうやら、倒したようだな」

すると、同時にホムンクルスの契約獣がその姿を現す。

「遅かったな」

「お前が早すぎただけだ。」

まさか、鳥の契約獣をこんなに早く倒すとは」

「これで、約束だよな」

「・・・規則だからな。」

仕方ない、しかし本当にするつもりなのか」

「当たり前だよ。」

メタは、私の親友なんだから」

「意思是硬いようですね。」

では、向かいましょう」

「向かうって、どこに?」

「決まっているでしょ、ルフランにですよ」

## 2人の契約獣

外道魔女の眷属を倒す事ができ、無事に釈放する条件を整えた俺達は、さつそく異世界ルフランへと向かう事になった。

これまで、名前だけは聞いた事があるルフランという世界に対して、俺は疑問に思いながらもルカと共にルフランへと訪れる。

「ルカ、ここがルフランなのか？」

「そうだよ、レンにとつては珍しいと思うよね」

そう、ルカは笑みを浮かべながらも、普段は身に纏っていない魔女の衣装と共に、周りを見せていく。

そこは現代の町に比べたら、少し古く、あえて言うならばハリー・ポッターに出てくる町並みに似ていた。

だが、それよりも気になるのは……

「なあ、ルカ……この建物って何だ？」

「それは、お城だよ。私もあまり詳しくないけどね」

その言葉を聞きながら、俺は目の前にある巨大な建物を指差す。

それはまるでヨーロッパにあるような城を思わせて、とても大きく見えていた。

そして、ルカから説明を受けた後で、今度は街を見て回ると、やはり現代とは違う部分が多くあり、特に気になったのは車やバイクではなく馬車だったりする事である。

そんな感じで街中を歩いていると、ルカはある場所で立ち止まる。

「着いたよ。」

「ここにあの人が居るんだ」

「えつと、ここか？　なんか凄いボロっちな……」

「まあ、そういう人だからね。でも、悪い人じゃないんだよ」

そうしながら、俺達は牢獄で目的の人物の元へと向かって行く。

牢獄の奥に行けば、行く程、薄暗くなっていく中で、ようやく目的の人物を見つける事が出来た。

「久しぶりですね、メタさん」

「ああ、久しぶりだな、レン」

メタは牢屋の中で座りながらこちらを見ると、すぐに視線を逸らす。

どうにもこのメタという人物は、見た目通りの性格ではないらしく、どこかぶつきらぼうな態度を見せていた。

それでも、ルカとは知り合いなのか会話を続ける。

「それで、そいつがお前の契約獣なのか？」

「はい、そうです！」

「私の相棒であるレンです！」

「ふーん……」

メタはそのまま見つめる。

「まさか、こいつが外道魔女の契約獣を3体も倒すとはな」

「でしよでしよ！」

「私の自慢です!!」

「そうか、にしてもまさか私を釈放するとは。

相変わらず、お前は天才なのにアホなんだな」

「むう！ また、メタはそういう事を言っつて!! とにかく、早くここから出しますからね

！」

「止めておけ。

どうやら、奴らにとって、私は邪魔な存在だからな」

「そんな事ないですよ！」

そう、ルカは叫ぶ。

「確かにメタは甘いものは好きだが、辛いものや苦いものを嫌う。

だがその実、ほとんど家に籠りきりで外の世界の知識は全て本から得た為見た目や言動に反して性格は幼いし、性格は傍若無人でかなり口が悪いです！」

「おい、契約獣。」

お前の主人は本当に私の親友なのか？」

そう言いながら、俺に向けて、メタは話しかけてきた。

「それだけ互いに信頼しているという事だろ」

「ふっ……そうかもな。」

だが、その信頼が裏切られた時、お前ならどうする？」

「……その時になってみないと分からないな」

「ふん、そうか」

それからしばらくした後、ルカとメタの会話が終わると、彼女はこちらに向ける。

「まあ良い。」

それに、私がここから釈放されないのは、私が見た物に関係しているからな」

「見た物？」

それって、メタが世界中を沼で埋め尽くそうとした計画の事？」

あまりにも軽く言うが、それはかなり世界でも危機的状況じゃないのか？」

「ああ、それをやっている時だ。」

私は偶然だが、ある奴を見つけた」

「ある奴？」

それに、俺は首を傾げる。

「外道の魔女だよ」

「外道の魔女って、それって蜘蛛達の事？」

「違うな。」

外道魔女はそもそも幹部などいない。

お前達が全て倒した契約獣は全て奴1人で契約している」

「なっ」

これまで戦ってきた外道魔女の契約獣達。

それはこれまで1人につき1体の契約という方程式を覆す衝撃だった。

「でも、なんで外道の魔女を見つけた事で掴まったのっ！」

「外道の魔女は、この世界の外道。」

つまりは人間のあらゆる負の魔法を使える。

そんな奴の封印場所を私のような問題児が見つかれば、何かされる可能性がある」

「えっと……」

その言葉にルカは困った表情を浮かべると、隣にいたレンが代わりに喋る。

「そういう理由で捕まえられて、ずっとここに居る訳ですね」

「ああ、そうだ」

「でも、封印場所を見つけただけで、そんな問題になんて」

「そもそも、なぜそこに居る奴の世界で契約獣が暴れているのか、知っているのか？」  
「えっ？」

それに、俺もルカも思わず首を傾げる。

「いずれ封印が解かれる外道の魔女から逃れる為の侵略だよ」

「そんなんっ」

その事実には、俺も、そしてルカも驚きを隠せなかった。

「なんで、そんな事をつー！」

「移住を行う為には、住む場所を増やす必要がある。」

現地の人間が邪魔な場合は契約した契約獣で殺していく」

「それだったら、なんでその契約獣と戦う魔女もいるのっ！」

「お前のように何も知らない奴らが戦えば、向こうの世界も友好的だと思う。」

つまりはマッチポンプを狙った動きがあるんだよ」

メタの口から語られる真実に、俺達は驚くしかなかった。

まさか、あの蜘蛛達が自分達の都合で世界を滅ぼそうとしていたとは。

そう考えていると共に、地震が起きる。

地面が大きく揺れて、立っている事も困難だ。

やがて、地震が収まると共に、街の外から悲鳴が聞こえる。

「一体何がっ」

「まさか、復活したのか」

メタの言葉に疑問に思う。

「外道の魔女が出てきたんだよ」

「っレン！」

「ああ、変身！」

ルカの言葉と共に、俺はすぐに仮面ライダーレーキンへと変身し、そのままメタの牢屋を外した。

同時にそのまますぐに外へと出る。

「なに、あれ」

外へと出ると共に見えたのは、不気味な存在だった。

様々な負の感情が入り交じった巨大な女性の顔が地面から出てきており、頭から伸びている足のような物は髪の毛だった。

その髪の毛から歪な動物のような形になりながら、街を破壊していた。

「あれが、外道の魔女っ」

「ああ、人間の負の感情を全て一つにした存在だよ」

「だったら、すぐに止める！」

「レンっ！」

俺はすぐに地面を滑りながら、真っ直ぐと外道の魔女に向かって、突っ込む。

周りの地面から巨大な土の拳を作り、そのまま外道の魔女に向けて、叩き込む。

しかし、こちらの存在を気づいた外道の魔女は、その髪の毛を別の生き物の形へと変える。

「こいつはっ！」

外道の魔女の髪の毛が変化したのは猿の契約獣だった。

猿の契約獣はそのまま俺の放った拳を避け、そのまま殴りかかる。

咄嗟に腕を使ってガードするが、衝撃を殺しきれずに大きく吹き飛ばされる。

どうにか空中で体勢を整えた瞬間には、もう次の攻撃が迫ってきていた。

それはまるでザリガニを人型にした姿の契約獣へと変わり、俺に向けて巨大な鋏を向けてくる。

それをギリギリの所で避けたが、地面にぶつかった鋏が地面を大きく砕き、大きな穴を作った。

だが、それと同時に外道の魔女の攻撃も未だに終わりが見えない。

その髪の毛は次々と様々な契約獣へと姿を変え、俺に襲いかかってくる。

その数は多く、対処するには少しばかり骨が折れそうだ。

そんな事を思いながらも、俺は迫り来る攻撃をどうにか回避する。

だが、それも長くは続かない。

いくら回避しても次から次に新しい契約獣が生まれていき、一向に減らないのだ。

そして、ついに外道の魔女本体からも、新たな契約獣が生まれる。

それは狸のような姿をしており、太い豪腕と太鼓が埋め込まれた腹が特徴的な契約獣だ。

その契約獣の豪腕によって、俺はそのまま吹き飛ばされる。

「ちっ」

吹き飛ばされ、本当だったら、襲い掛かるはずの衝撃。

だが、その衝撃は来なかった。

見れば、メタが俺に落ちるはずだった地面を沼に変えていた。

それによって、衝撃は完全に殺されている。

「ボロボロじゃないか」

「まだまだだつなんとかできるさっ」

そう言いながら、俺はなんとか立ち上がる。

「なぜ、そこまで戦おうとする」

「んっ？」

それと共に、メタが俺に尋ねてくる。

「なんでつて、ここの人達を守る為だよ」

「だが、お前の世界を無茶苦茶にしようとした連中でもある。

そんな奴を助ける意味が、果たしてあるのか？」

確かにこの世界では色々あった。

だが、それでもこの世界の人は悪い人だけじゃないはずだ。

少なくとも、ルカみたいに良い人もいるはずなんだ。

「それに……」

「それに？」

「もしも、俺が知っているヒーローである仮面ライダーだったら、そんな理由で見捨てないからな」

俺はそう、言いながら、立ち上がる。

「……まったく、貴様は馬鹿な奴だな」

「いや、確かに馬鹿だけど」

俺はそう言いながら、思わずルカに言う。

「だが、そんな馬鹿ならば、これからやる馬鹿げた方法に乗る可能性もあるな」  
「馬鹿げた方法？」

俺はそれに疑問で首を傾げる。

「私と契約しろ」

そうメタは俺に向けて言う。

「契約つて、俺は既にメタと契約しているんだけど」

「ああ、そうだな。」

だが、契約獣が複数の魔女と契約しては駄目というルールなどない」  
「それは、そうかもしれないけど」

「まあ、決めるのは、お前次第だな」

メタはそう言いながら、不敵な笑みを浮かべる。

俺は思わず、迷っていると。

「レン、やろうよ！」

「ルカ」

すぐ傍で、ルカが俺に話しかける。

「良いのか？」

「まあ、普通契約獣が他の魔女と契約するなんて、夫が浮気するぐらい最低な行為だけど、私はメタの事も大好きだから！ 全然平気だよ！」

「そういう事だ。」

「さあ、どうする、やるのか？」

「やらないのか？」

「その言葉に対して、俺は一瞬、迷うが。」

「ああ、やってやるさー！」

「その言葉と共に、俺は手を前に伸ばす。」

「同時に満足したように、メタは俺の手を重ねる。」

「さあ、これから、お前は私の契約獣だ。」

「私、沼の魔女であるメタ」

「そして、錬金の魔女であるルカ！」

「2人の魔女と契約せし、契約獣！ その名も！」

「その叫び声と共に、俺の身体に大きな変化が起きる。」

「これまでのゴーレムを思わせるその姿は丸く重厚な黒い鎧と白と内側の青色のマン  
トを付けた騎士を思わせる姿へと変わっていた。」

身体のあらゆる箇所には錬金術を思わせる模様が描かれている。

「……………これは？」

「これが、今のお前の姿だ」

メタの言葉を聞きながら、俺は自分の姿を見ていると。

「底のない沼のように、限界のない錬金が行える。」

その名は仮面ライダー・オージンとしておこう」

「オージン、なんだか格好良いし、それで良いな」

同時に俺はそのまま外道の魔女へと見つめる。

「さあ、勝利を錬金するぜ」

## 悪意の終わりに

レーキン・オリジンへと、新たな姿が変わった。

その力は、これまでの力とは違う感触。

俺はそれに対して、驚きながらも、手をゆつくりと確認する。

「ぼけっとしている場合じゃないぞ」

メタの、その言葉と共に目の前を見る。

既に悪意の魔女は、髪から無数の契約獣を作り出した。

各々が、様々な魔法で。

炎を。

氷を。

雷を。

風を。

眼前に広がる攻撃の嵐。

普通ならば、すぐに避けるべきだろう。

だが、この姿になって、むしろ余裕と考える。

俺はゆっくりと手を開く。

それと共に、俺の眼前に現れたのは壁だった。

それもただの壁ではなく沼の。

泥の壁だった。

それは、普通ならば、あれらの攻撃の嵐を受け止められないだろう。

だが、泥の壁は。

容易く攻撃を呑み込んだ。

「これは」

「沼は底なしだ。」

どのような攻撃も届かなければ意味はない」

「つまりは、どんな攻撃も防げる訳か」

それに、思わず笑みを浮かべる。

そして、悪意の魔女はそれを見て、奇声をあげる。

既に理性などない。

まさに悪意に完全に支配されている姿。

「そして、底なし沼に上限などない。

泥で、好きに作り出せ」

「つまりは」

「君の想像で、錬金は無限に強くなれるよ！」

レンのその言葉に俺は思わず笑みを浮かべる。

「だったら、試すしかないよな！」

同時に俺も、それに答えるように、構える。

悪意の魔女は再び髪で次々と契約獣を作り出す。

それに対して、俺は、底なし沼の壁に手を入れる。

同時に、底なし沼の壁で吸収した様々な魔法を錬金する。

水は火を消すというが、逆に火を強くする事だつて出来るはずだ。

そして、そのイメージを元に、俺は泥を更に変質させる。

ドロリとした液体のように。

それを形作っていく。

そうして出来上がったのは、炎を模した巨大な腕だった。

大きさとしては、巨人の腕よりも少し小さいぐらいだろうか？

それでも、十分に大きい。

その炎の巨人の腕を襲い掛かる契約獣を吹き飛ばす。

しかし、それらの攻撃を掻い潜ってきた契約獣もいる。

それに対して、俺は次に行ったのは、泥で作り出した剣だった。

その大きさは、まさに変幻自在であり、俺の意思一つで自由に形を変える事が出来る。それが何本も現れて、襲ってくる契約獣を次々と斬り裂いた。

そのまま俺は、地面に手を付ける。

すると、地面が盛り上がりながら姿を変えていく。

それは、大きな土人形だった。

人の形をした巨大な土人形。

そいつらは一斉に走り出すと、契約獣に向かって拳を振るう。

それはまるで巨人が振るったような一撃となり、契約獣達をまとめて吹き飛ばした。

だが、それで終わりではない。

俺は再び手を付き直すと、今度は、地面から巨大な柱が現れた。

それは槍のような形をしており、高速回転しながら突き進む。

それが次々と契約獣を貫きながら貫き通していく。

そんな攻撃を繰り返している間に、気付けば、全ての契約獣を倒し終える。

「ああああああ!!」

それに対して、悪意の魔女は真っ直ぐと俺に向けて叫ぶ。

彼女が、何を行ったのも分からない。

きつと、悪意の魔女も、被害者かもしれない。

レンがメタを救いたいという思い。

メタが偶然で捕まってしまった事。

それらは、この世界における悪意によって、多く踏み潰され、悲痛な叫びとなった。それを晴らす事はできないだろう。

だからこそ。

「底なし沼のように、どんな思いも受け止める」

俺はそれと共に構える。

悪意の魔女への介錯を行うように。彼女は怒り狂っているように見える。

おそらくは、彼女の心の中には、様々な感情があるのだろう。

その全てを受け止めるように。

そして、その足に纏った泥は、巨大な悪意の魔女を簡単に飲み込める程の大きさへと変化する。

その大きさに驚いたのか、それとも恐怖を覚えたのか。

悪意の魔女は逃げようとする。

だが、既に遅い。

既に、俺は飛び上がっており、彼女に対して、必殺を放つ体勢に入っていたからだ。

だから。

俺は大きく振りかぶると、悪意の魔女目掛けて、そのライダーキックを繰り出した。  
『…………』

一瞬にして視界が真っ白になる程の閃光に包まれる。

同時に、爆発音が響き渡り、辺りには砂煙が立ち込めていた。

そんな中で俺は着地し、目の前を見る。

そこには、悪意の魔女がいたと思われる場所があった。

それと共に、既に戦いが終わっている事を理解した。

「どうやら、勝てたようだな」

「まあね、さて」

そう言いながら、俺達が考えていると、こちらに近づく気配を感じる。

見ると、そこにはバン達が立っていた。

「まさか、悪意の魔女が倒すとは」

「というよりも、まさか俺を一人で任せるか」

そう、俺は呆れたように見つめる。

「すまないな、俺は今回の一件を起こした奴を捕まえたからな」

同時に人造人間の契約獣が言っていた。

「それでこれからどうするか？」

俺の言葉に、人造人間の契約獣である彼は答える。

「さあな。」

だが、しばらくは契約獣に関連する法律は厳しくなるだろうな」

彼の言葉を聞きながらも、俺達の視線は、目の前にある大きな穴に向けられていた。

「ここまでの厄災を作り出したからな」

「厄災ねえ」

俺にとっては彼女も被害者だったと思っている。

ただ、彼女が起こした行動により、多くの人が苦しんだ事も事実だ。

それに……。

「レン君」

そう、俺が思い悩んでいると、ルカがこちらに近づいた。

「暗い事、考えているでしょ。」

まあ、分かるけど」

「ああ、俺は結局倒すしかできなかつた。」

他に方法はなかつたのかと」

「そうだね、けど、それは私達だけじゃ、多分分らないよ」

「それは」

「だからこそ、皆がいるでしょ」

そう、ルカはこちらを見る。

「錬金術は一つの物質だけじゃ決してできない。

様々な物質があり、それを理解し、組み合わせる事でできる。

それと同じだよ」

そう言いながら、ルカは俺の手を握る。

「レン君の優しさに私の知識。

きつと、1人1人には違う考えや魅力がある。

それらを組み合わせる事できつとこれまでにない物を作れる」

「……そうかもしれないな」

錬金術が新しい物を作れるように、1人ではできない事。

それも多くの人の考えが組み合わせる事で、新たな可能性が生まれる事もある。

それを長い戦いで学んだ。

「ありがとう、ルカ」

「いえいえ」

そう言いながら彼女は笑顔を見せる。

「さて、それじゃ、どうしよう。

これからルフランに住み続けるのは」

「キヒヒっ、ならば」

そうしていると、メタが笑みが何を意味するのか、俺とルカは思わず首を傾げる。

## 後日談

あの戦いが終わりを迎えた後、俺達はそのまま元の世界へと帰ってきた。

あれから、人造人間の契約獣の言葉通り、俺達の世界にいる契約獣による被害は少なくなっている。

そう報告を受け、俺の仮面ライダーとしての戦いは終わりを迎えた。

「それで、聞きたいんだが」

「なんだ？」

そう俺は気になった事もあって、後ろを見る。

「なんで、お前が俺の家にいるんだ、メタ」

そう、現在、俺の家で居候しているのは、ルカだけではなくメタもだった。

「何を言っているんだ。」

お前は私と契約したんだ。

ならば、ご主人様の世話をするのが、契約獣のお前の仕事だろ」

そうメタは俺に向けて、笑みを向けてくる。

「だからってな……」

確かにあの時、俺はメタと契約して、レーキン・オリジンになった。その事に関しては、後悔はなかったが、

まさかこんな事になるとは……。

「ごめんねえ、メタは一応向こうでは最悪の犯罪者扱いだから、生活しにくいと思って  
そうルカは俺に対して謝ってくる。」

「ルカも、あんまり甘やかすなよ」

ルカも、悪い奴じゃないんだけどなあ。

まあ、いいか。

これからの生活を考えると頭が痛くなるけど。

「ほら、行くぞ。」

「まずは朝食の準備から始めろ」

「そうやってメタは先に行ってしまう。」

「ああ、待ってくれよ」

俺は呆れながらも食事の準備を行う事にした。

「けど、未だに信じられないよね」

「ん？ 何がだよ？」

台所で準備をしている最中、ふいにルカが話しかけてきた。

「だってね。」

こうして親友のメタと、君と一緒にこうやって住めるなんてね」

そう言葉を告げた瞬間、ルカはそのまま寄り添う。

「ルカ？」

「本当に、良かった。」

こうしてまた会えて」

ルカは涙を流しながら、笑顔を見せる。

「そうだな」

「うん！」

俺達は笑いあうと。

「おい、何時まで、かかっている」

「うわっと」「メタ」

俺がそう話していると、メタが急に現れた。

「まったく、早くしろよ」

「ごめんって」

そう言っていると、ルカは何か気づいた様子。

「ルカ？」

「まったく、契約獣が暴れているよ」

「まだ暴れている奴がいるのかよ」

「まあ、自分の力を高める為に野望の為に動く奴は未だにいるからな。」

「いわば、はぐれだよ」

「そうメタもまた、呆れたように言う。」

「とりあえず、さっさと片付けるぞ」

「ああ」

俺はその言葉と共に、朝食を作るのを止めて、クモバイクを呼び出す。

同時に俺は腰にレーキンドライバーを巻く。

「変身！」

その言葉と共に、俺は仮面ライダーへと変身する。

「どうやら、未だに仮面ライダーとしての戦いはまだ終わらないようだ。」

それは、この日常は終わらない事もあった。

「けれど、それでも……」

「いくぜー！」

俺は、そう言いながら走って行く。